

2016年3月26日

第106回山口西田読書会（2016年3月26日）

第105回（同年3月19日）のプロトコル

前回参加者：佐野、深野、千葉、植田、桑原、田中、谷、福田、藤村（恭）、堀川、萬納寺、山口、岡部（計13人：順不同、敬称略）

報告：岡部昌平

冒頭で山口西田読書会の理念「教わるのではなく、自らともに哲学する」を再確認し、プロトコルに沿って「哲学書を読む」とはどういうことかを考えた。その後、この春山口大学教育学部を卒業した植田翔君の卒業論文発表があった。

I 哲学書を読むということ（プロトコルを確認しながら）

104回の哲学的問い「テキストを読むとはどういうことか。自説に都合のよいところだけ頷いて自説を固めることに利用し、そうでないところは反発するか、読み飛ばす、これはテキストを読んでいることになるのか」に関する参加者の意見がまとめられた。（※詳細は読書会ホームページ「これまでの記録」3月19日掲載のプロトコルをご参照ください。）続いて、哲学において「テキストを読む」ことに関する佐野教授の所懐が述べられた。それは次のようなものであった。

1) 生きている間は生き、死ぬときは死ぬ

我々がいくら迷ったところで生きている間は生きているし、死ぬときには死ぬ。そのことは事実であるし、変わりはない。しかし、わたしたちは意識的な存在であり、生きる場合にどう生きるかを問題にする。死ぬ場合でも残された命をどのように終えていけばよいか問題になる。それがわからない。わたしたちが意識的であることを忘れて「死ぬときは死ぬ」と言うのは半面的なのである。人間は動物のようにただ死ぬことはできない。人間は迷いながら生き、迷いながら死ぬ。それが人間の生き方であり、死に方である。

2) テキストは誤読を許すか

年を重ねて読みが深くなる、音楽の聞こえなかった音が聞こえてくる、などのことがある。しかし、正しい知識を獲得するための読書に誤読が許されるとは考えにくい。それでは哲学書を読むとはどういうことか。読んだり、聞いたりするとき、わたしたちのなかで何が起きているのか。

人間の一大関心事に自分の存在（自分がある）がある。自分が確かにこうであると言えればよいが、意識を持った人間は「自分がある」とは言えない。自分自身を対象化することができないのである。（意識の構造を持っている以上は）「自分がある」と確かには言えない。だから人間は自己存在に非常に敏感である。挨拶が返ってこない、返事が返ってこないと「無礼だ」と怒り、不安になる。自己存在が揺るがされているからである。電車で居眠りをして目覚めたとき「ここは何処か、わたしは誰か」をまず確かめる。行きの電車の自分か、帰りの電車の自分かを確認する。自分が何者であるかを常に確認しながら、その存在を「自分がある」として受け取らざるを得ない。

聞く、話すも同様に、聞いている内容、話している内容より、まずそれが何であるかの外枠を聞いている。「講座である」などが分って身の振り方を考える。講座であることがはっきり分かっているときも、まだ内容を聞いていない。誰が話しているか、偉い人間の発言かそうでないかなどの外枠を聞いている。敵か味方か、をまず聞いている。自分が信じてきたもの（自説）と、どのように関わっているかに関心があるのである。自分の関心に重ねたり、補ったりして自説を固めようとする。自分が気に入った人だと話を鵜呑みにし、そうでないと意味も確かめずに吐き出す。

さらに相手の話を聞こうとする場合でも、いちいち賛成か反対かに関心が向く。自分に益があるかないか、どうでもいいか、常にアンテナを張って聞いている。それも外枠を聞いていることであ

って内容を聞いていることにはならない。

(沈黙が言葉の源泉でもあるように) 言葉は言葉にならないものを指し示している。読書会の理念に「西田先生が考えようとしたこと」とあるのはその意味である。そして「読む」とは、それに触れることである。言葉にならないものに触れることが読むことである。

また「書かれた言葉」であることも問題になる。西田先生が書かれた一つ一つの言葉があり、それをわたしたちは分別をして、捌(さば)きながら聞いていく、自分の理解に落とし込んで分った気になる側面がある。自分の理解に落とし込むときでも、自分の人生観にとって役に立つか立たないか、賛成か反対かを選択しながら取り入れている。しかし、そこに書かれていることが人生観にない場合、理解できない、読めないということが生じる。

読めなくて困ったとき、多くの人はそれを拒絶したり、無視したりする。それが出来なければ自分の理解を変えて読みなおすほかはないし、さらに深刻になると、これまで信じてきたこと(自説)を変えなければならなくなる。人間は自説がなければ生きられないし、自説を変えることは大きな不安をとまらう。

年をとるほど自説への執着が強くなり、自説を杖にして生きる。それは長年生きてきた自負でもあり、認めてもらいたい気持ちも強まる。それを否定することは、自分のこれまでの人生を否定することになるからだ。読むということで外枠を聞くというのは、自分の杖を固めようとするのだが、人生はそれを許してはくれない。

3) 翻訳

分らない言葉に出会ったとき、自分の知っている言葉に置き換えることをする。わたしたちは常に翻訳という作業をしている。「私」というとき、誰もが知っている言葉であっても、人それぞれの「私」でしかない。寺の鐘が「ごーん」と鳴っても、過去に照らしてそれを判断している。「意識が存在をつくる」というときも、どうしても自分なりの価値付けをしてしまう。そこでひっかかってしまう。理解を可能にするための翻訳が、理解を妨げ、誤解を生じるのである。そして、それは避けられないことでもある。

誤解を生じることが避けられないのだから、さらに読み進めようとするとう理解ができない、分らないということが誰でも生じる。それは自分の人生観自身が問われているということであり、自分の人生観に納まらない何かに出会う機縁でもある。それによって人は、それまでの自分を突破する。

読む、見る、聞くということは、それまで自分が生きてきた業縁にしたがって読む、見る、聞く以外にない。そこで、読むことも、見ることも、聞くこともできないものに出会うことが起こり得る。それがまた読める、見える、聞こえるということに繋がるのである。

II 植田君卒業論文発表「対話と交わり---フレイレとヤスパースにおける---

ブラジルの教育学者フレイレの『被抑圧者の教育学』にある「対話」、ドイツの哲学者ヤスパース『哲学』にある「交わり」より、そこに通底する「対話の本質」に関する考察が発表された。

※これに関しては、まとめを「これまでの記録」に掲載するか検討中。

III 哲学的問い

個人の読書ではない読書会とは何か。なぜ「ともに」哲学することがよいのか。

哲学はおのずから生まれるが、それは個のなかにある。それを取り出して言葉にし、対話することには困難が付きまとう。自分のなかでの言語化、相手が理解する言葉への言い換え、やりとりで生じる誤解など、予測される困難を承知で集い、対話することの積極的な意義はどこにあるのか。わたしたちは何のために集うのか。さらに対話することは、読むこととどのような関係にあるのか。